兵庫人 挑む

題字は牛丸好一さん

地域に芽吹く「小児医療再生の兆し」

1面から続く

知恵と情熱 子どもに注ぐ

産科と同様、崩壊の危機が叫ばれる小児科。大学からの派遣医師に依存してきた地方では常勤医を確保できず、休診や縮小を余儀なくされる公立病院も少なくない。

「小児医療を守るには、まず人材の育成。若手医師が働く職場の魅力を高めることも足掛かりとなる」。そう提唱する松尾雅文（六一）が小児科長を務める神戸大付属病院は、約二億二千万円かけて小児科フロアを全面改修。今年四月、新生児用病室や無菌室などを設け、より幅広い疾患に対応できる「こどもセンター」がオープンした。

江原伯陽医師

病室や点滴処置室の壁や天井に動物などの絵が施されている。治療を受ける子どもが怖がったり、緊張したりしないようとの計らいからだ。海外の先進的な小児科病棟にも頻繁に足を運び、参考にした。「小児科医にとっても働きやすく、やりがいの持てる職場。想像以上のものができた」と松尾は満足げに話す。

学生時代、未熟児室の中で育つ赤ん坊の姿に、命の持つ果てしない力を感じ、小児科医を志した。今なお治療法が確立されていない専門の筋ジストロフィー治療では、患者自身の遺伝子を生かした「副作用のない方法」を考案、世界をリードする。

日本小児科学会の理事を務め、兵庫の小児医療再編でかじを取る。神戸大、県立こども、兵庫医科大の三カ所を「中核病院」と位置付けるとともに、地域拠点となる十カ所のセンター病院に医師を重点配置、高度治療の態勢を整える。今月、医師不足が深刻な但馬地域の重症児をヘリコプターで神戸に搬送する協定を取りまとめた。

再編の一方で、丹波市や西脇市では、過酷な小児科勤務医を守ろうと、患者の母親らが市民に呼び掛け、不必要な受診を控える運動が起きた。夜間や休日、気軽に救急診療を受ける、いわゆる「コンビニ受診」防止の取り組みだ。

「小児医療の再生につながる画期的な動きが、兵庫からわき上がったことが何よりうれしかった。『守らなければ』と市民が思える、そんな医師を育てたい」

●

ドアノブクエスチョン―。神戸大では松尾の五年後輩に当たり、西脇市で小児科医院を開く藤田位（五五）は、治療が終わって診察室を出る直前、患者が発する言葉にしっかりと耳を傾ける。

「医師を前にすると母親たちは緊張する。ドアノブに手を掛け、診察室から出ようとするとき『先生、実は…』で始まる問い掛けにこそ大事な情報が含まれている」。待合室に戻った後も看護師が必ず声を掛けるようにしている。

患者側とのコミュニケーションを、藤田は常に心掛けてきた。十五年前の開業以来、続けている母親たちとの交換ノートには、体温や食事のメニュー、服用した薬など病気の子どもに関するデータが細かく記されている。夜中に高熱を出したわが子の容体を六年にわたって報告した人もいた。

イラストを交えたり、メッセージを添えたり。「交換ノートは患者との大切な対話」と話す藤田位医師＝西脇市和布町、藤田小児科医院（撮影・山口登）

「気付いたことは、どんなささいでも書き留めてもらう。成長過程や体調変化が詳細に記録されたいわば第二のカルテなんです」と藤田。優に二万冊は配った。

「将来、このノートを見た子どもたちは、注がれた愛情の大きさを感じるに違いない」

② 守れ 小さな命

●

三田市の開業医江原伯陽（五四）は、地域医療の厳しい現実を「半世紀近く前から目の当たりにしてきた」。台湾出身。内科医だった亡父は、留学先の日本で医師免許を取得した。「医師がいなくて困っている村を助けてほしい」と友人から相談され、父は一九六六年に伯陽ら家族を連れて来日した。

着任したのは、現丹波市氷上町の診療所。四千人が暮らす地域で約二十年間、医療を支えた。江原は、そうした父の姿を見て育ち、同じ医師となった。

阪神・淡路大震災で診療や炊き出しのボランティアに参加するなど、支援活動に熱心な江原は、九九年の台湾大地震で医療支援チームに参加。米中枢同時テロでは子どもの心的外傷後ストレス障害（PTSD）に関するパンフレットを日系企業に送り、二〇〇二年には戦闘下のアフガニスタンを訪れ、傷ついた子どもらを診察した。

三池輝久医師

同年、未熟児で生まれたり、障害がある子どもを支援するため、新生児医療に携わった経験のある開業医らで「赤ちゃん成育ネットワーク」を設立した。メンバーには藤田もいる。「地域医療の大切さは身をもって理解している。だからこそ支えになりたい」

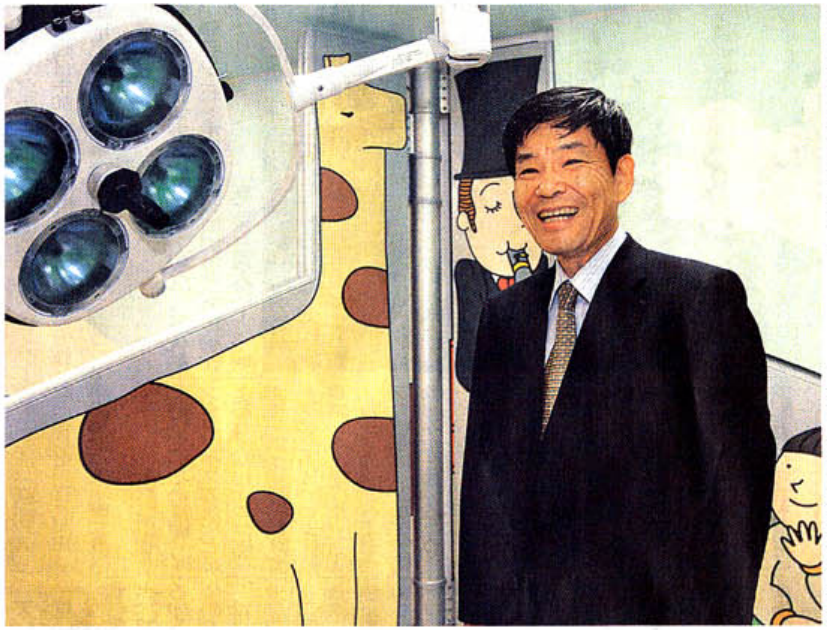
新たな分野から兵庫の小児医療にかかわる医師もいる。

三池輝久（六五）は今年四月、熊本大教授から神戸市の県立総合リハビリテーションセンター内「子どもの睡眠と発達医療センター」長に転じた。松尾と同じ筋ジス治療が専門。現在は不登校問題を医学的見地から研究する。

「不登校児は、自律神経の異常が見られ、生体リズムが狂い、睡眠障害や脳の機能低下といった症状が出る」

三池は「放課後も塾や習い事、部活動に追われて心も体も休まる余裕がなく、睡眠不足が慢性化する」と、現代社会に警鐘を鳴らす。「より詳しい不登校の原因を突き止め、改善につなげるのが小児科医の使命だと思う」（敬称略）

（社会部・今泉欣也）



第17部 医の先導者たち

こどもセンターの診療室で、小児医療への思いを語る松尾雅文医師＝神戸市中央区楠町7、神戸大学付属病院（撮影・山口登）

人・地域・未来 110年 神戸新聞